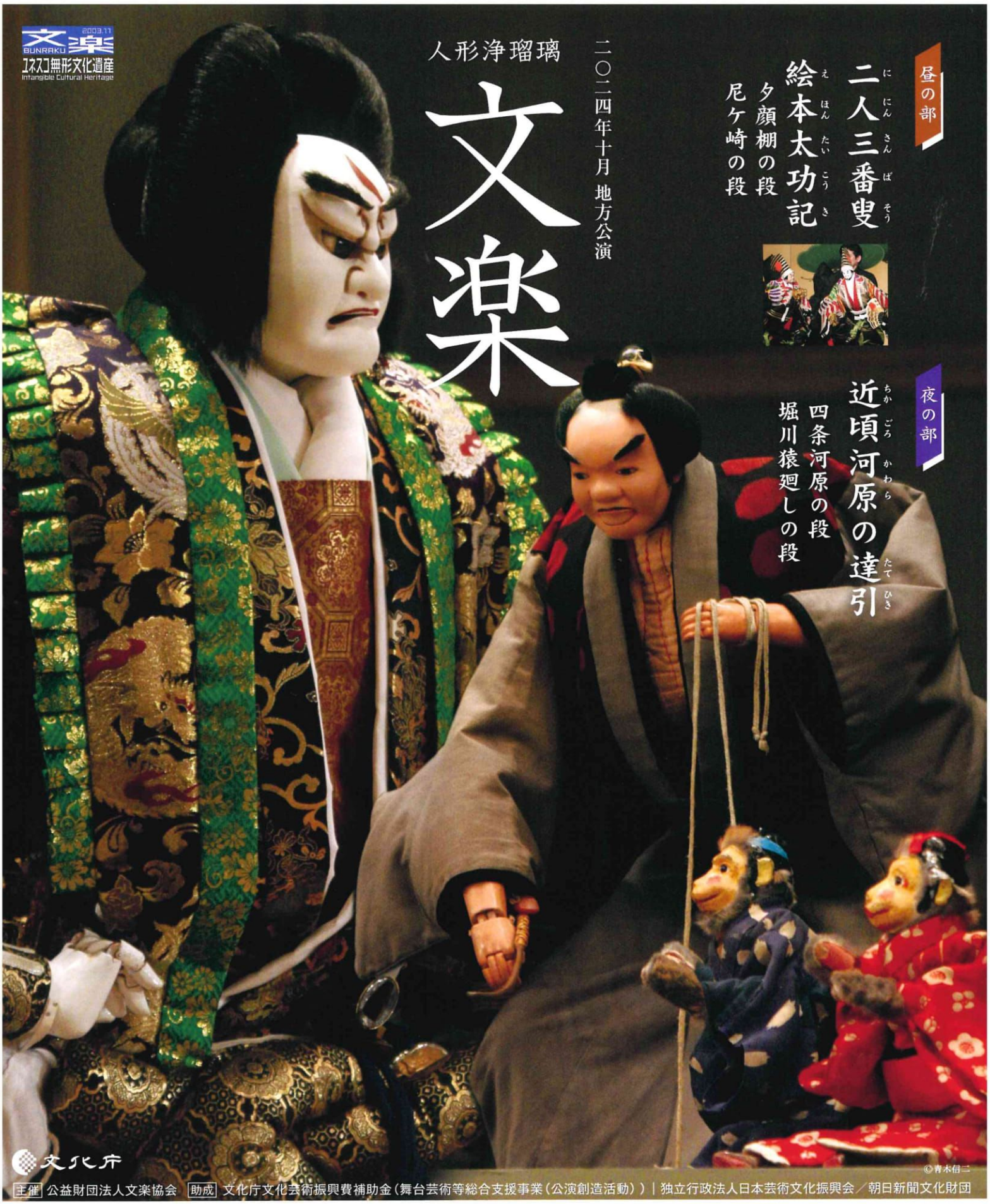

主催 公益財団法人文楽協会　助成 文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））｜独立行政法人日本芸術文化振興会／朝日新聞文化財団

2024年**10月18日**[金]
■昼の部 13:30開演（13:00開場）
■夜の部 18:30開演（18:00開場）

札幌市教育文化会館 大ホール
札幌市中央区北1条西13丁目
www.kyobun.org

料金
全席指定 5,000円 教文ホールメイト、KitaraClub会員は500円引き
U25 3,000円 1999年以降にお生まれの方であれば学生に限らずご購入可能

主催：札幌市教育文化会館（札幌市芸術文化財団）、公益財団法人文楽協会
後援：札幌市、札幌市教育委員会、文化庁

お問合せ／札幌市教育文化会館事業課
TEL 011-271-5822（9:00-17:00 土日祝、10月以降は休館日除く）

公演の最新情報はこちら ►

チケット発売日
8月21日[水]
10:00～

■チケット取扱
- 教文プレイガイド　011-271-3355 ※取扱開始は10月以降
- 道新プレイガイド　0570-00-3871　中）大通西3 道新本社1階
- 市民交流プラザチケットセンター　中）北1 西1 札幌市民交流プラザ2階
- チケットぴあ　Pコード：528-765
- ローソンチケット　Lコード：11582
- セイコーマート セコマコード：D24101801（販売期間8/21～10/11）

- 教文ホールメイト、KitaraClub 会員の割引、U25 は道新プレイガイドのみの取り扱いです
- 車いす席をご希望の方は教育文化会館事業課までお問合せください
- 未就学児のご同伴・ご入場はご遠慮ください
- 公演中止および主催者が定める既定による対象者を除き、チケットの変更・払い戻しはいたしません

二〇二四年十月 地方公演 配役表

昼の部

解　説（あらすじを中心に）　竹本聖太夫

二人三番叟

（人形役割）

三番叟　豊竹亘太夫　三番叟　吉田文哉
三番叟　竹本碩太夫　三番叟　吉田玉勢
豊竹薫太夫
鶴澤清公
鶴澤燕二郎
鶴澤清方

絵本太功記

夕顔棚の段

（人形役割）

豊竹希太夫　母さつき　桐竹勘壽
鶴澤清馗　妻操　吉田勘彌
鶴澤清介　嫁初菊　吉田一輔

尼ケ崎の段

前　豊竹呂勢太夫　旅僧実は真柴久吉　吉田玉輝
鶴澤清治　武智光秀　桐竹勘十郎
切　豊竹呂太夫改め　武智十次郎　吉田玉佳
豊竹若太夫　百姓　大ぜい
鶴澤清介　軍兵　大ぜい

囃子　望月太明藏社中

夜の部

解　説（あらすじを中心に）　豊竹薫太夫

近頃河原の達引

（人形役割）

四条河原の段

伝兵衛　豊竹睦太夫　横淵官左衛門　吉田勘市
官左衛門　竹本小住太夫　仲買勘蔵　桐竹亀次
勘蔵　竹本聖太夫　井筒屋伝兵衛　吉田玉志
久八　竹本碩太夫　廻しの久八　吉田玉翔
野澤勝平　稽古娘おつる　桐竹勘次郎
与次郎の母　吉田簑一郎

堀川猿廻しの段

猿廻し与次郎　吉田玉也
切　竹本千歳太夫　娘おしゅん　豊松清十郎
豊澤富助　駕籠屋　大ぜい
ツレ鶴澤燕二郎
切　竹本錣太夫
竹澤宗助
ツレ鶴澤清公

囃子　望月太明藏社中

◎字幕表記がございます。席によっては字幕が見えにくい場合がございますので、あらかじめご了承ください。
◎出演者の急病やその他やむを得ない事情により、代役もしくは演目を変更して上演する場合がございます。あらかじめご了承ください。
◎上演中、客席内での写真撮影・録画録音ならびに携帯電話・スマートフォン・タブレット等の使用は固くお断りいたします。また周りのお客様の観劇の妨げになりますので上演中はお持ちの携帯電話・スマートフォン・スマートウォッチ等は電源をお切りになるか音・光・振動の出ないように設定をお願いいたします。
◎観劇時は咳エチケットの励行ならびに、手洗いなどの感染症対策にご協力のほどお願い申し上げます。

二人三番叟

能で特に神聖視される『翁』を義太夫節に移し、慶事に上演される『寿式三番叟』。その中から、二人の三番叟の舞を独立させました。義太夫節ならではの力強い響き。人形の躍動的な舞。足遣いの踏む足拍子と三番叟が振る鈴の音も心地よい、熱気あふれる舞台です。

絵本太功記　夕顔棚の段・尼ケ崎の段

明智光秀が京都の本能寺に宿泊中の織田信長を滅ぼした「本能寺の変」（1582）を題材とする時代物で、寛政11年（1799）、大坂の道頓堀若太夫芝居で初演。当時刊行中の読本（よみほん）『絵本太閤記』の人気を受けて、近松やなぎほかが合作し、発端に、1日を1段として、光秀が謀反を決意する6月1日から命を落とす13日までの13段が続く構成になっています。

忠臣光秀は、"鬼の再来"と恐れられる主君春長の悪逆を諫めて、度重なる屈辱的な仕打ちを受け、6月2日、ついに本能寺を襲撃。光秀にとっては万民を救うための天誅でしたが、母さつきは、主殺しなど断じて許せず、6日、逆賊との同居は汚らわしいと、ひとり京を去り、尼ケ崎へ。

謀反を知り、急遽、備中から軍勢を率いて都へと引き返す久吉。尼ケ崎の近くで待ち受ける光秀勢。10日、さつきのもとを訪れたのは、光秀の妻操と息子十次郎、その許嫁（いいなずけ）の初菊。そして、宿を乞う旅僧も。その正体を久吉と察し、様子をうかがう光秀に気づく老母。

討ち死覚悟の十次郎が、悲しみを胸に初菊との祝言をあげ、出陣したあと、旅僧は、さつきに勧められ、風呂へ。外から竹槍で突く光秀。ところが、中にいたのは母。主殺しの罪深さを思い知らせるため、わざと息子の手にかかったのです。そこへ味方の敗北を告げに戻った十次郎は、絶命寸前。一夜も添うことなく夫と死に別れる初菊、我が子を失う操、二人の慟哭…。光秀は、涙も束の間、天王山での決戦を久吉と約束するのでした。

兵庫県尼崎市を舞台とする「尼ケ崎」は、天下のための挙兵が家族に悲劇をもたらした光秀の苦悩と悲しみが胸に迫る、全編の山場です。

近頃河原の達引　四条河原の段・堀川猿廻しの段

京の二条河原での心中（1702?）で知られたおしゅん・伝兵衛に、四条河原での刃傷沙汰と、貧しい猿廻しが親孝行で褒賞されたことを絡めたとされる、三巻の世話物で、眼目は中の巻の「堀川猿廻し」。気はやさしくて臆病者、文字は読めなくても誠実に生きる猿廻しの与次郎を中心に、その日暮らしの貧しさの中、互いに思いやる家族と、その別れを描いています。天明2年（1782）、江戸の外記座で初演され、好評を博したこの段は、大坂で上演されたある時代物の猿廻しのくだりをもとにしたものですが、作者、成立等、作品全体についての確かなことはよくわかりません。

大名の御用を勤める伝兵衛は、相思相愛の祇園の遊女おしゅんに横恋慕した出入先の侍を殺してしまい、お尋ね者に。

おしゅんの兄、猿廻しの与次郎は、目の見えない、病身の老母を大切に世話する孝行息子。伝兵衛との関係で店からひそかに実家に戻された妹のことも、心配でなりません。母もまた同じ思い。伝兵衛が心中しに来たら…。二人は、おしゅんを死なせまいと、伝兵衛への離縁状を書かせ、一安心。

その夜、現れた伝兵衛に妹の手紙を突きつける与次郎。ところが、それは母と兄に宛てた書置きでした。あくまでも伝兵衛と死ぬ覚悟のおしゅん。残された家族の嘆きを思い、一人で死のうとする伝兵衛。けれども、大事な夫を見捨てては、女の道が立たないと、おしゅんは聞き入れません。

その思いに心動かされ、母は娘を伝兵衛と行かせることに。与次郎はめでたい猿廻しで二人を送り出すのでした。

「そりゃ聞こえませぬ伝兵衛さん」に始まるおしゅんのクドキや、悲しみの漂う猿廻し（華やかな旋律に乗せて、人形遣いが左右の手で一体ずつ猿を遣います）で有名な、人気演目です。